

Zoom書こう会 俳人のたわごと

首藤 静夫

風は少々冷たいが光は春である。三月の句会に向け、家の近くを独り吟行した。多摩川の近くに住み、周囲には畑や果樹園がわずかながら残る。古い社寺もある。都心に比べ恵まれていると思う。しかし、句材は多くはない。

近年鳥が減った。河原に雉が鳴かない、雲雀も少なくなった。河原がグラウンド等の用に供されているのも一因だ。住宅地では四十雀以外のカラ類は見かけない。燕の飛来も減った。蜥蜴、蛇はいつ見ただろうか。梅、椿はあるが日本タンポポがない、辛夷こざしがない、あつてもどこかの庭に申し訳していどだ。住宅は目一杯に壁が聳え、中の暮らし向きを窺い知るべくもない。それぞれ、自分の「城」で快適な生活を送っているのだろう。

俳句の基本は実景の客観描写であるが、その景色が縮小している。生の自然や生活に触れての作句が難しくなった。故金子兜太氏は、実景にしがみつく時代ではない、心の奥に情景を作れという。だが実景の感動に優るものはない。我々は自然からどんどん離れ、自分の穴蔵に閉じこもっている。

これは人間の精神活動に大きな影響を与えていそうだ。自然や周囲の人間関係から培われるであろう感受性や優しさ、思いやりや感謝の心が乏しくなり、信じるものも愛するものも見えなくなり……。

独り吟行をしながら考えた、科学技術の進歩は福音となっているだろうか、人類の「心」の成長とかけ離れて科学技術だけがこんなに飛ばしているのか。しかし、一度開けたパンドラの箱は元には収まるまい。

米国やカナダではアーミッシュという信仰集団が、電気も車もない粗衣粗食の生活を今でも送っているという。信仰と心の平安を生きがいとする彼らにとって便利な生活、快適な生活はどのように映るのだろうか。強欲資本主義、過度の合理主義と背中合わせで進む科学技術がこの先どのような展開を見せるのか、あまり見たくない。

結局、一句もできなかった。夜はワインでも飲み、スマホをいじくって快適に過ごそう。